

特集

半径5メートル
から始まる世界

起業家の
ための
教育？

何のために
やるの？

探究とは
どう違う？



アントレプレナーシップ とは何か？

最近、「アントレプレナーシップ（起業家精神）」という言葉をよく耳にするようになってきました。また、アントレプレナーシップ“教育”を小中学校や高校に裾野を広げて導入することも検討されており、注目を集めています。

アントレプレナーシップ教育について編集部で議論を交わしたところ、さまざまな疑問が出てきました。「アントレプレナーシップの定義って何だろう?」「何のためにアントレプレナーシップ教育は必要なんだろう?」

「探究学習とは何が違うんだろうか?」

答えをもたないまま取材を重ね、考えを深めながら記事を作っていました。

そして、アントレプレナーシップについて知れば知るほど、イノベーションを起こす起業家だけに必要な資質・能力ではなく、もっと身近な「半径5メートル」の日常で育まれるものかもしれないと感じました。

アントレプレナーシップとは一体何なのか。読者の先生方と一緒に考えてみたいと思い、本特集を企画しました。



Question

全国の先生方に聞いてみました。

アントレプレナーシップ教育の現状

昨年8月、全国の高校を対象に実施した「高校教育改革に関する調査2022」のなかで、アントレプレナーシップ教育についてたずねてみた。

3ページの図の通り、「アントレプレナーシップ教育を導入・活用している／検討している」と回答した割合は全体の約18%となっており、現時点では導入・活用する予定がない高校が多数であった。高校タイプ別に比較すると、専門学科では約25%と他学科より割合が高く、専門科目と関連づけて取り組んでいる高校が多そうだ。

アントレプレナーシップ教育に取り組むにあたり、どのような課題や不安があるかをたずねたところ、高校教育で取り組む必要性を疑問視する声が多く聞かれた。また、導入を検討する際、アントレプレナーシップ教育に対する知識やノウハウの不足、教員の負担の大きさなどが課題として挙げられた。

そもそもアントレプレナーシップとはどのような資質のことを指すのか、どのように育まれるものなのかがわからないと、高校教育のなかで取り組むことが難しいという現状がありそうだ。逆に言うと、アントレプレナーシップとは何かという本質を考えることで、既に行っている教育活動との接点を見つけることができるかもしれない。

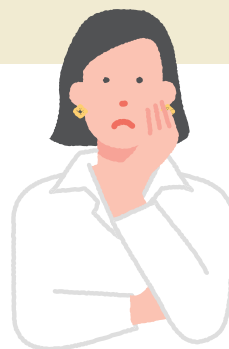
図 「アントレプレナーシップ教育」の導入・活用状況（全体／単一回答）

	n数	導入／検討中・計					導入／検討中・計 (%)		
		学校全体、もしくは一部で導入・活用している	導入・活用していないが、導入・活用を検討している	導入・活用をしていないし、する予定もない	わからない	無回答			
2022年 全体	943	9.5	8.6	58.7		22.8	-0.3	18.1	
設置者別	国公立	676	8.7	7.7	59.6		23.7	-0.3	16.4
	私立	267	11.6	10.9	56.6		20.6	-0.4	22.5
高校タイプ別	普通科	758	8.8	8.6	60.4		22.0	-0.1	17.4
	総合学科	60	8.3	8.3	53.3		28.3	-1.7	16.7
	専門学科	109	15.6	9.2	49.5		24.8	-0.9	24.8

「アントレプレナーシップ教育」に取り組むにあたっての課題や不安

- 起業に対して資質のある人間はそもそも一部である。多くは起業した人を支える側になる。それにもかかわらずその精神を高校教育で涵養することについての意義が理解できない（東京都／私立／普通科）
- 全高校生に必要な素養だとは思えない（埼玉県／県立／普通科）
- 関心はあるものの、探究活動やICTの導入など、優先度の高い他の教育活動で精一杯の感がある。教員の働き方改革も叫ばれる現在、さらなる教育活動の拡大には慎重にならざるをえない（島根県／県立／普通科と他学科併設）
- 一般的に言って、教員があまりもち合わせていない精神の教育に校内の組織のみで取り組むのは難しい。この教育の意義、現代の生徒にとっての必要性、具体的なモデルとなる授業など研修できる機会が必要（茨城県／県立／総合学科）
- 専門的な知見をもつ人材が少なく、指導に苦戦している（福岡県／市立／総合学科）
- 基礎的な知識や技能の向上が最優先課題と考えている。知るからこそ面白みが理解でき、そこから創造が広がり、アントレプレナーシップにつながると考える（神奈川県／県立／普通科）
- 現実的ではないし、高校生段階で行う必要が現状では不明（富山県／私立／普通科）
- 商業科で導入しているが、普通科でどう取り入れるか、人数も多いので規模をどうしていくかなど検討している（岐阜県／私立／普通科と他学科併設）
- 全体像がよくわからず取り組みにくい（香川県／県立／専門学科）
- 高校生段階での導入は、真摯な社会人としての生き方よりも、安易な進路選択を導く危険性につながるという不安がある（神奈川県／県立／普通科）
- 民間での経験のない教員で取り組んでいくことは現実的でなく、起業家教育をするために必要な人材を学校がどのように確保し活用できるかは大きな課題（福岡県／県立／普通科）
- 「総合的な探究の時間」を上手に利用しながら導入を考えているが、他科目内でも可能か模索が必要（愛知県／県立／総合学科）

どうやって
教えればいいか
わからない...



高校で
教える必要は
あるのだろうか？

＼ 先生・学校の“？”に答える / アントレプレナーシップ

Q & A

高校の先生方を対象にしたアンケートでは、アントレプレナーシップ教育に対して、さまざまな声が寄せられました。ポジティブな意見もネガティブな見方もあるなか、まずはアントレプレナーシップ教育そのものを理解することが、一歩を踏み出すための糸口になるのではないかと考え、アントレプレナーシップに詳しい忽那憲治先生に教えていただきました。



忽那憲治先生

くつな・けんじ ● 神戸大学大学院経営学研究科・教授。
大阪市立大学大学院経営学研究科修了。主な研究対象領域はアントレプレナーシップ、イノベーション、アントレプレナーファイナンス。共著に『アントレプレナーシップ入門 ベンチャーの創造を学ぶ』(有斐閣ストゥディア)など。

忽那先生が教えてくれた

「アントレプレナーシップ」の定義・要素

1

課題に対して
前向きに向き合う姿勢

2

自分のもっているリソースに
とらわれない思考

3

失敗を前提に行動し、
失敗から学ぶこと



Q

「アントレプレナーシップ」って、 そもそも何ですか？

A



課題解決に向けたマインドと
行動様式のこと。

「アントレプレナーシップ」は「起業家精神」「起業家活動」と訳されますが、最近は「起」ではなく「企」の字を当てることも増えてきました。これは、アントレプレナーシップが起業する人に限らず、すべての人に求められる課題解決に向けた考え方やマインドであり行動様式であることを意味しています。また、「精神」だけでなく「活動」を伴うこともポイントの一つです。

起(企)業家的な精神・活動には、大きく3つの要素が含まれます。1つ目は、**課題に対して前向きに向き合う姿勢**です。「現状はこうだから仕方ないよね」ではなく、「課題を解決するために、自分には何ができるだろうか」とできることに目を向けるということです。

2つ目は、**自分のもっているリソースにとらわれない思考**です。自分には知識やスキル、経験が「ないからできない」という思考ではなく、「必要なものをいかに集めるか」を考え、実際に行動します。新しく知識を学ぶ、スキルをもっている人と組むなど、「こうやったらできるんじゃ

ないか」とさまざまな手段を模索するマインドセットです。

3つ目は、**失敗を前提に行動し、失敗から学ぶこと**です。エジソンの「私は失敗したことがない。1万通りのうまく行かない方法を見つけただけだ」という名言が、まさに言い当てています。失敗をする可能性が高いことを前提に、トライアルを重ね、小さな失敗をたくさんすることが重要です。時間をかけて入念に準備したことが失敗に終わるとダメージが大きいです。やりながら軌道修正していく進め方なら、失敗を糧にできます。

アントレプレナーシップと聞くとハードルが高く感じられるかもしれませんが、先生方自身が、知識やノウハウが不足するなかアントレプレナーシップ教育に取り組もうとすることこそが、アントレプレナーシップです。まずは、「～だからできない」という発想から、「どうしたらできるか」という発想に変えることから始めてみるのが肝心です。



Q

アントレプレナーシップ教育は、なぜ必要なのですか？

A



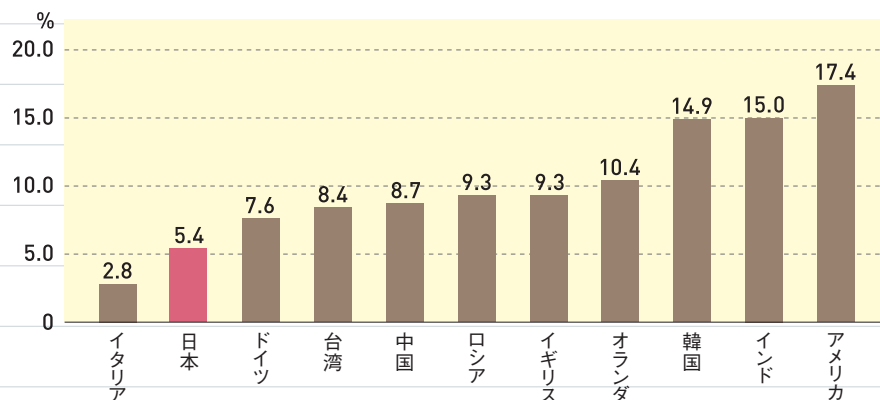
人生を切り拓いていくために役立つものだから。

日本は諸外国に比べて起業率が低く、イノベーションや新規事業を起こしやすくすることが課題だと言われています。だから子どもたちにアントレプレナーシップ教育が必要…という側面はもちろんあるのですが、それは一面にすぎません。私自身は、大学生や高校生はもちろん、中学生や小学生にとっても発達段階に応じたアントレプレナーシップ教育が必要だと考えています。なぜなら、**アントレプレナーシップの本質は、「どんな未来を自分の手でつくり出したか」にあるから**です。

イノベーションも発明も、発端は「こんなもの・サービスがあればいいな」というビジョンです。そ

して、それを実現するにはどうしたらいいかを考え、試行錯誤を重ねることが、アントレプレナーシップです。一方、子どもがやりたいことを見つけたときに、「～がないからできない」と諦めるのではなく、「どうしたらできるか」を自ら考え、失敗しながらもチャレンジを続けることも、まさにアントレプレナーシップです。そう考えると、アントレプレナーシップ教育は一部の人に必要な「専門科目」ではなく、より良く生きるための「一般教養」であると言えるでしょう。想像力、発想力が豊かで思考が柔軟な若いうちにアントレプレナーシップを身につけておくことは、自分の人生を自分で切り拓いていくために有効なのです。

■ 世界各国の総合起業活動指数 (TEA)



Global Entrepreneurship Monitor: GEM 2019/2020 Global Report (2020) より



Q

アントレプレナーシップ教育を どう取り入れたらいいですか？

A



失敗を奨励する空気づくりから。
探究では偶発的な出会いを。

これまでの教育では、間違わないこと、失敗しないことが求められてきました。一方、アントレプレナーシップ教育では、失敗することが前提になります。まずは、失敗していいんだ、失敗から学んだというマインドを、先生も生徒も共有することが大事です。多様な意見や間違いを否定しない、「わからない」という状態を「わかる」にするにはどうしたらいいかを考える、いろいろな方法でやってみる、うまくいかなかったら違う方法でトライしてみる…というのは、どの科目でも実践できるのではないのでしょうか。

アントレプレナーシップ教育を盛り込みやすいのが探究学習です。おすすめは、メンバーを固定しないグループ探究です。まずは自分のやりたいテーマを考え、そこに共感してくれるメンバーと合流して、アイデアを出し合ったり、具体策を考えたりするのです。流動的で偶発的な出会いによりリソースが組み合わさって、一人では思いつかないアイデアが生まれ、一人ではできないことができるようになる。この過程を体

感できれば、それはまさにアントレプレナーシップ教育だと言えるでしょう。この「共感を得る」「人を巻き込む」というのも、アントレプレナーシップの一つです。自分にはないリソースを手にするためには、それをもつ人を仲間にする必要があります。そのベースになるのが共感であり、人の心を動かす力の源になります。

アントレプレナーシップには、自由な発想で大胆なアイデアを出すことも含まれます。簡単にできて楽しく取り組めるワークを紹介しましょう。経済学者のシュンペーターは、「新しいものはゼロから生み出されるのではなく、既存のものとの掛け合わせだ」と述べました。実際、ほとんどのものはくっつけ方が新しいのです。例えば「いちご+大福=いちご大福」など、身のまわりにはさまざまな事例があります。こうしたものを挙げたうえで、「くっつけたら面白いもの」のアイデアを生徒に考えてもらいます。発想の独自性や意外性を楽しみましょう。



アントレプレナーシップを 育む高校事例

半径5メートルの身近なところから課題を見つけ、
各々の学校に適した道筋で生徒たちのアントレプレナーシップを育む取組に
チャレンジしている高校事例を紹介します。

Case1

自分ごと化しやすい課題に、 体験的に取り組む“50センチ革命”を テーマにした探究学習

金沢高校（石川・私立）



元・探究企画室
寺西 望先生(右)、
森下 広大先生(左)

地方で生きるうえで必要な 起業家精神を醸成したい

金沢高校では今年度から、2年生の総合的な探究の時間(以下、探究)で生徒が選択する分野として、「起業家教育」を取り入れている。

同校の起業家教育の導入は2018年度にさかのぼる。この年に、中小企業庁の「学びと社会の連携促進事業(起業家教育)」に参加。

地方創生や高校魅力化プロジェクトを手掛ける(株)Prima Pinguinoの藤岡慎二氏を講師に招いた「起業家教育プログラム」を実施した。この事業への参加を決めたのは、当時探究を担当する部署の副主任だった寺西 望先生だ。

「地方で生きていくには、起業家精神が大事だと考えています。都市に比べて雇用機会や、消費者として楽しめるサービスなども多くはありません。受け身で雇用やサービスを得るのでは

取材・文／長島佳子



なく、自ら新しい価値や機会を創って提供する側になった方が、生徒たちが自分の好きなことをしたり、充実した人生を送れると思っています」(寺西先生)

2018年の「起業家教育プログラム」は、夏休みの5日間で実施。1～3年生の希望する生徒を対象とした。身近な人を幸せにする「50センチ革命」をテーマに、高校生活で感じる違和感を発見し、解決策を考え、アイデアをまとめ、プレゼンテーションを作成する手法を、地元で活躍する起業家などの講話も含め、理論から実践まで学んでいった。

「このときは企画から実施までを藤岡さんにお任せしましたが、プログラムのレベルが高く、生

徒たちが消化不良な部分もありました。そこで、次年度からは本校の生徒に合わせ、理論の部分は減らし、実践部分に絞り込んだプログラムを自分たち教員が中心になってやってみようと考えました」(寺西先生)

生徒に育みたい資質としての 起業家精神は授業でも養える

取組を通して寺西先生が大切にしていたのは、「行動すること」だ。

「課題を見つけるのも、解決策を探すのも、外に出て観察したり、人に話を聴いたりする行動や体験が欠かせません。だからフィールドワークを重視しています。元のプログラムの“50セン

金沢高校・起業家教育の流れ



「“革命”というテーマは、生徒が身近なことから課題を自分ごととして捉えやすく、フィールドワークをするうえで動きやすい範囲という視点からも大切にしていきたい切り口です」(寺西先生)

翌年以降も夏休みに希望者対象で実施してきたが、部活動に所属する生徒が参加しづらいことが課題だった。そこで、今年度は総合的な探究の時間に起業家教育を組み込むことにしたのだ。

「自ら課題に向かって行動していくというアントレプレナーシップは、どの生徒にももってほしい資質・能力でもあります。すべての生徒が対象となれるよう、探究の授業の選択肢として組み込むことにしたのです」(寺西先生)

失敗や行き詰まりも含めた 体験と過程で学びが深まる

探究では、生徒は2～5人一組のチームとなり、チームごとに20の分野から選択して課題研究を行う。基本は学問ごとに分野を設定しているが、そのなかに、起業家教育を入れた。

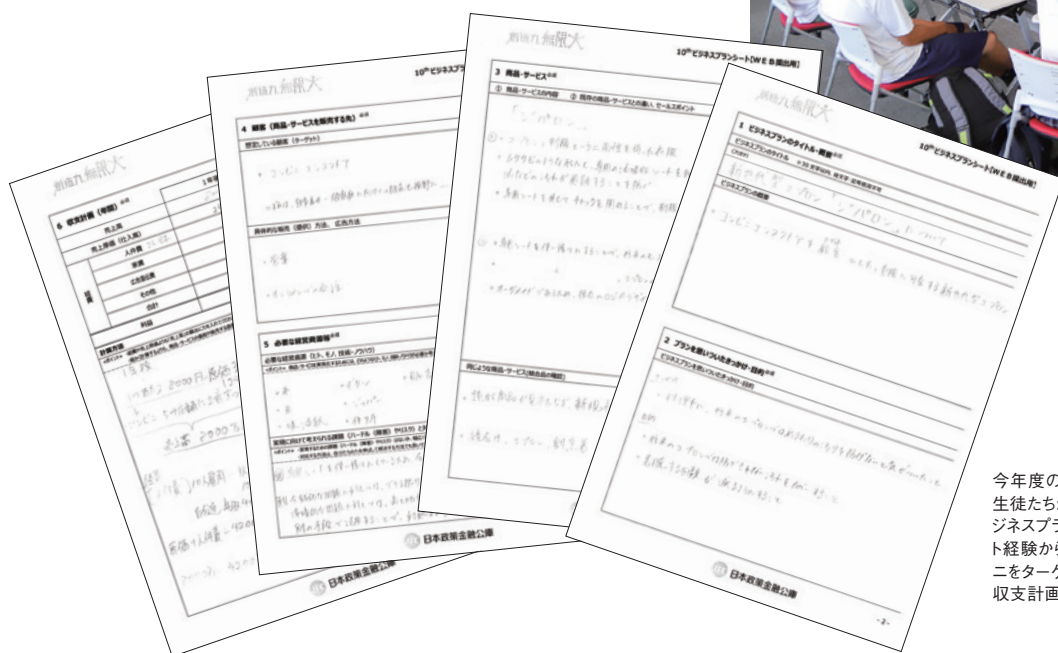
起業家教育チームのプログラムは、昨年度まで5日間20時間で実施していた内容を踏襲し、それを1年間35時間の探究の時間に割り振って実施している(9ページの図参照)。

寺西先生と共に「起業家教育プログラム」に携わってきた森下広大先生は、失敗や行き詰まりも含めて、生徒たちが体験を通して多くの学びを得ていると感じている。

「生徒たちにとって、課題も解決策も簡単に見つけられることではありません。行き詰まりも経験しながらそのときにどうするか、自分一人ではなく、仲間と共に考える過程で学ぶことが大きいです。我々教員も伴走者として、すぐに答えを言わないなど、どんな声かけをすると生徒の学びが深まるのかを考える機会になっています」



地元の起業家などからなる審査員の前で、自分たちのアイデアをプレゼンする生徒たち(写真は昨年度の実施例)。



今年度の探究で起業家教育を選択した生徒たちが現在進行形で作成しているビジネスプランシート。コンビニでのアルバイト経験から、課題を見つけ、全国のコンビニをターゲットとした商品開発を検討中。収支計画もびっしりと書かれている。



(森下先生)

寺西先生は起業家教育について、自分なりの定義はまだできていないと言う。

「起業家を育成するという目的ではなく、誰かを幸せにする解決策を見つけるという点において、他者の存在が大事な取組ではないかと考えています。探究全体では、自分の興味の範囲での課題でも良いのですが、起業家教育を選択した生徒には他者視点をより意識してもらえ

たらと思います。一方で、アントレプレナーシップは、自分で解決したいと思う課題を見つけて、そのテーマに没頭し、自ら動き出す力だと思います。だからすべての生徒に必要です。“50センチ革命”は探究の全分野に共通していて、身近なところから課題を見つけ、行動することで解決策を探していくという意味では、本校の探究全体がアントレプレナーシップ教育なのかもしれません」(寺西先生)

学校データ

1928年創立／普通科(全日制)／生徒数1281名(男子724名、女子557名)。現在、Sコース、特進コース、進学コースの3コース制。質実剛健の校訓の下、教員も生徒と共に成長していく“共育”を理念としている。

体験することで、考える力が鍛えられる



2年生 小出啓太郎さん(左)、林 蒼太さん(右)

「お客さんを集めるための方法に興味があったから」と、探究で起業家教育を選択した生徒に、現在進行形の授業についてお話を伺いました。

理想の商品を作る過程を 実社会の段取りに沿って体験

小出さん 僕たちは自転車通学をしており、金沢は雨が多いのですが、今売られている雨合羽ではどうしても足元が濡れることに課題を感じていました。僕たちのチームではそれを解決する商品開発を目指しています。まずはどんな雨合羽がいくらくらいで販売されているか、市場調査をしました。自分たちで作るとしたら原価がどれくらいかかるのか、素材の価格の相場なども調べました。競合する類似商品と比較しな

がら、どうしたら自分たちだけのアイデンティティを見つけられるかに苦労しています。

林さん 競合商品と比較しながら、価格競争でも負けないようにするには、特徴を絞り込んでそぎ落とさなければならないこともあると考えさせられました。消費者とはどんな人なのかを考えるなど、社会で実際に行われているマーケティングを体験できているのが面白いです。

抽象化の概念が身につき、 他者の意見で 視点の広がりを実感

小出さん この授業を通して、人の話を聞いたり質問をされたときに、それが難しい内容だとしても、「これってつまりこういうこと?」と、自分が理解できるほかのことに例えて

捉え直して考える、抽象化する力がついたと思います。振り返りがあるので、そのときに体験中に自分が悩んでいたことを反芻できているからだと思います。

林さん 発表の機会が多いので、ほかのクラスやチームの人たちの考え方を知ることができ、「こんな見方もあるんだ」と刺激になります。ほかのチームと意見交換するとき、まずは自分の意見をかためてから視点の違う人の意見を聞くと、そこからどんどん枝分かれしていろいろなアイデアが広がっていくのが楽しいです。商品開発という言葉聞いたことはあっても、実際にやってみるとではまったく違うことに気づけました。体験してみて初めて、考える力や発想力が鍛えられるのだと知りました。



生徒の真の主体性の育成を目指し、 教育課程外でスタートした 「三高みんなの食堂プロジェクト」

三本松高校（香川・県立）



校長
泉谷俊郎先生



教育研究部部长
3年生担当
森 麻衣子先生



教育研究部
1年生担当
兼島 翼先生

自分たちの学食を良くする 生徒主体のプロジェクト

生徒に育みたい力として主体性に重きを置く三本松高校。生徒たちの内発的な主体性を発揮できる場を提供しようと、教育課程外での生徒プロジェクトを複数進行している。

「主体性は『主体的に学びなさい』と指示されて育まれる力ではありません。自ら『やってみたい』と思うことで生まれます。本校では授業など従来の教育課程の枠の中で主体性を発揮することが容易ではない生徒も多かったため、まずは気軽に手を挙げやすい場を提供しようと

考えました」(泉谷俊郎校長)

泉谷校長が着任した2020年、少子化による生徒数の減少やコロナ禍により、学食の経営悪化が課題となっていた。そこで学食の運営を地域の農業法人に依頼するとともに、生徒たちの学びの場にもしようと考えたのが「三高みんなの食堂プロジェクト（以下、食堂プロジェクト）」だ。コンセプトは、「SDGsの視点をもって、持続可能な食堂をみんなで作り上げ地域を盛り上げる」。

食堂に関心をもつことや、利用することも「参加」ととらえ、生徒全員を参加者としている。プロジェクト活動としては、食堂を良くするため



(左) 学食入口ののれんの文字は、地域産業の廃棄物である革の端材で内装・装飾チームが作成。
(右) 食堂を利用することもプロジェクトへの参加のひとつとして、全校生徒が関わっている。

取材・文／長島佳子



の課題を見つけ、自分の得意を生かすことができそうな分野で貢献したい生徒を「プロジェクトリーダー」と呼んでいる（2022年度のリーダーは52名）。あくまで自主的な立場のため、強制力はなく、評価もない。担当教員もつけておらず、先生たちも希望によって自主参加したり、生徒から求められたときに手助けする立場だ。

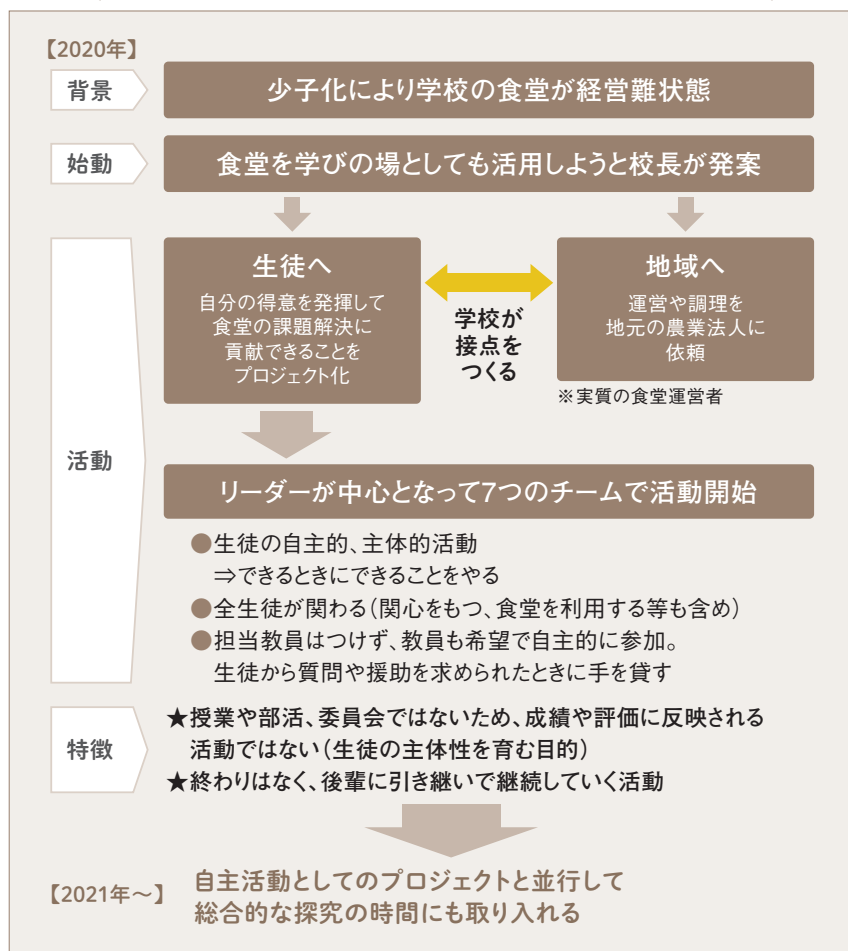
「評価がないので生徒たちは安心してチャレンジして失敗もできます。うまくいかないことを経験することも高校生には大切だと考えています」(泉谷校長)

リーダーたちは学校の中心となって、畑、マルシェ、イベント企画、内装・装飾、メニュー開発、広報、総務の7チームで活動している。例えば、

総務チームは活動に必要なお金の管理や食堂の利益を確保するための飲料の仕入や販売など、食堂の経営改善につながる活動をしたり、内装・装飾チームは地域産業の廃棄物や使われていないものを再利用して食堂のインテリアを作ったり、食器に使用したりしている。まさに起業家のような活動を実践しているのだが、泉谷校長は、アントレプレナーシップを意識していたわけではないと語る。

「主体性を育むために、食堂という身近な環境を提供しただけです。その身近さによって、生徒たちが自分で解決したいと思う課題を見つけやすく、助けが必要なことがあれば地域の大人に力を借りにいき、自分の強みを生かして挑戦でき

「三高みんなの食堂プロジェクト」の流れ



ているので、結果としてアントレプレナーシップにつながっているのかもしれませんが」(泉谷校長)

校内課題から始まる探究にプロジェクトを組み込む

食堂プロジェクトは、地域から注目され多くの取材を受けているほか、「高校生ボランティア・アワード2022」で大会委員長の「さだまさし賞」を受賞するなど、外部から高い評価を受けている。

リーダーを務めた生徒たちの自己肯定感が高まり、成長していく姿を見たことで、2021年度からは、総合的な探究の時間にも食堂プロジェクトを取り入れ始めた。探究に組み入れることで2年生の普通科全生徒が課題に取り組むことになった。

「探究は地域課題に取り組む学校が多いですが、本校の生徒にとっては、より身近な校内課題から入ったほうが自分ごとにしやすいと考えました。食堂プロジェクトは校内課題として関心が高く、生徒が多様な得意を発揮できます」(泉谷校長)

「プロジェクトではリーダーに手を挙げられなかったけれど、本当はやりたかった生徒も多かったようで、そうした生徒たちにもチャンスを与えられる良い機会となりました」(森 麻衣子先生)

探究の授業とすることで、日常のなかにかに課題を見つけられるか、問いの立て方の練習から始めている。

「校内課題には2年生で取り組みますが、1年生では“日常を疑う”をテーマに、当たり前だと思っていたことを疑問文に置き換えて問いづくりをしています。身近なところに課題が存在していることや、課題を自分ごととして考え、解決



(上)畑チームは校内に畑を開墾し、大根やネギ、スイカなどを栽培。収穫物を食堂の食材として利用し、コストを下げる。(左)地域の生産者から規格外の野菜や廃棄される魚の部位などを引き受けて利用する、メニュー開発チーム。ハマチの中落ちが絶品ハンバーグになった。



自ら考案したオリジナルメニューや地域の野菜を、各地で開催されるマルシェで販売するマルシェチーム。



(写真右から)2022年春の卒業生の伊澤未波さん、大下真里奈さん、奥谷菜々美さん



策を探る力を体系的に身につけてもらいたいと考えています」(兼島 翼先生)

教員は、生徒と地域をつなげ 視野を広げるサポーター

リーダー経験者には、地域の人々や大学生との関わりで視野を広げ、自分のやりたいことを見つけた生徒も多い。取材時に偶然、食堂に手伝いに来ていた卒業生の一人の大下真里奈さんは、広報チームの活動に関わってくれた香川大学の学生の影響を受け、現在大学の創造工学部に進学。将来は地元の東かがわ市のブランディングに関わる仕事をしたいと考えているという。

「教員の役割は生徒と地域の接点をつくるなど、生徒たちの視野を広げてあげることです。好きなことの先に広がっている世界を知ると、生徒たちは自ら進んでどんどん動き始めます。自分の好きや興味から動くことで主体性を体感し、プロジェクト以外でも自ら動く力を身につけていきます」(泉谷校長)

身近なこと、自分の関心ごとから始まったプロジェクトのなかで、生徒たちは一緒に活動する大人から直接地域課題を見聞きすることで、地域のことが自分ごとになっている。自分たちの食堂を良くしたいという思いが、地域や世の中を良くしたいという思いへと広がることで、将来の夢を見つけるきっかけになっているようだ。

学校データ

1900年創立／普通科(単位制)／生徒数409名(男子212名、女子197名)、全日制(普通科、理数科)・定時制。
食堂プロジェクトのほかに、献血ボランティア活動や虎丸ゼミなど生徒主体の活動を重視している。

失敗も経験しながら、対象を考えて話す力がついた



3年生 食堂プロジェクト代表 亀井遼樹さん

プロジェクトリーダーだった先輩に勧められて、2年生のときから自分もリーダーの一人として活動を始めました。食堂プロジェクトの魅力は希望すればチームを複数兼務したり、自由に活動できること。自分も総務や広報の活動に参加していました。

例えば総務チームでは自分の発想で食堂の売上げを増やすために冷凍ジュースを仕入れて販売したり、広報チームではオープンスクールで食堂プロジェクトの宣伝をしたりしてきました。食堂プロジェク

トがやりたくて入学を決めた中学生もいたと聞いて嬉しかったです!

プロジェクトでは取材を受けたり、コンテストなどで発表する機会が多々あります。取材は月に2件くらい、発表は自分が担当したもので今までに10件以上経験しました。でも、最初のころは何をどのように話せばいいかわからずうまく伝えられていませんでした。失敗を通して、話す対象によって、相手の気持ちを考えて内容や話し方を変えていくとうまく伝えることに気づくことができました。例えば

環境系のコンクールなら、我々の活動が環境に貢献する部分に重点を置いたり、オープンスクールなら中学生に親しんでもらえるように、明るく楽しそうに話すなどです。

将来はゲーム業界で働きたいと思っていますが、食堂プロジェクトでの経験から、ゲーム業界で広報の仕事がしたいと考えるようになりました。好きなことを仕事で生かす方法を、プロジェクトのなかで見つけた感じです。総合型選抜で志望校に合格できたので、大学でさらに学びを深めたいと思います。



私たちが高校時代、 身近な課題に向き合って 得たものとは？

どのような経験をするのが、アントレプレナーシップの育成につながるのでしょうか。
高校時代、身近な気づきや課題感から生まれたアイデアの実現に取り組んだ、
高校3年生と卒業生の4人に、どのように取り組んだか、そこから何を得たのか、
オンラインで語り合っていました。

参加者の
皆さん



泉 友梨香さん

吉賀高校(鳥根・県立)・
普通科3年生



松本理枝さん

三国丘高校(大阪・府立)・
文理学科3年生



後藤結衣さん

京都すばる高校(京都・府立)・
起業創造科卒業/
福知山公立大学 地域経営学部
地域経営学科1年生



小山雄矢さん

つくば工科高校(茨城・県立)・
ロボット工学科卒業/
千葉工業大学 先進工学部
未来ロボティクス学科1年生

高校生らしい視点で 身近な課題に着目

——高校時代、生徒主体のプロジェクトに取り組んだ皆さんにお集まりいただきました。まず、それぞれどんなテーマに取り組んだのか教えてください。

泉 総合的な探究の時間で、3年間ずっと地域の自然に関する活動を行いました。生まれ育った吉賀町は山に囲まれていて、私は小さいころから夏休みは川を遊び場とし、夜は満天の星を見上げるなど、自然と共に暮らしてきました。当たり前を感じていた自然ですが、改めて目を向けるとすごく魅力的だと思ったんで

す。これを町外にも発信することで、たくさんの方が町を訪れるきっかけをつくりたいと考え、地元の木を使ったものづくりや自然イベントなどの企画に取り組みました。

松本 私はビジネスプランを考える授業で、「食べられるお弁当用カップ」の開発に挑戦しました。ちょうどレジ袋の有料化が進んだ時期だったこともあり、海洋汚染にもつながるプラスチックごみを減らすことに興味をもったのが始まりです。調べてみると海外には「食べられる食品用ラップ」があるとわかり、その素材になっている「スコビー」という菌を使って、私たち高校生もよく使うお弁当のおかずカップに応用できないかと考えました。実は、おかずカップは日本だ



けでも年間約140億個使われていて、そのごみを重ねるとエッフェル塔の10倍以上の高さになるそうなんです。これは減らす効果が大きいと考え、テーマに設定しました。

後藤 私の出身校では商業科目のなかでさまざまなプロジェクトに取り組めますが、なかでも印象に残っているのは、2年生のときに「地域の賑わいづくり」のビジネスアイデアとして、野菜自動販売機の設置を提案したことです。地域を歩き回って住民の方の話を聞くなかで閑散とした様子を実感し、また、伝統的な食文化を支えてきた農業が衰退しつつある状況が見えてきました。そこで、野菜の自動販売機なら人が密になることはなく、コロナ禍に配慮しつつ幅広い人が地域の良さを知るきっかけになり、生産者の方の新たな収入源を生むことができるのではないかと考えました。

小山 ロボット工学科の学びの集大成として、「盲導犬ロボット」の開発に取り組みました。点字ブロックや信号を認識して自動走行し、目の不自由な人を目的地に案内するというものです。発案の基は、僕自身が網膜剥離を患った経験です。一時期は視野が半分ぐらいになり、とても不便を感じました。また、盲導犬の数が減少していることも知り、目の不自由さを補うロボットができないかと考えたんです。

できる保証はなくとも
自分の足で一步を踏み出す

——どんなふうプロジェクトを立ち上げていったのでしょうか。

泉 実は、1年生のときは何をしたいのかまったくわからず…。形になる活動はあまりできませんでした。それでも「自然を広める」という

軸はもち続け、2年生では、もっと対象を絞ったほうが効果的だと考えて、地域特有のコウヤマキの自生林に焦点を絞りました。そのなかでコウヤマキのスプーンを作るという企画を立てても、女子だけのチームだったので木を伐る作業に挫折…。3年生で1人になっても活動を続け、ようやく高校生を対象にしたコウヤマキ自生林での山登りイベントの実施にこぎつけることができました。

松本 私たちは、周りの誰もが「スコビーって何？」という状況でしたから、とても自分たちに実現できる気がしませんでした。でも、このテーマを続けるか・やめるかの決断を迫られたとき、

＼ 泉さんの取組 ／

地域のすばらしい
自然を広めたい！



▶ 山登りイベントの開催

吉賀高校がある島根県吉賀町は、土地のほとんどが山林という農山村地域。町内で生まれ育った泉さんは、その豊かな自然のすばらしさを町外の人たちにも広めたいと考え、1年次にグループで地域の自然を軸にした地域活性化に向けた取組を開始。2年次からは、町の天然記念物コウヤマキに焦点化。3年次に個人活動として、コウヤマキ自生林に触れる高校生対象の山登りイベントを開催した。



地域の協力で実現した山登りイベント

ベースとなった授業

総合的な探究の時間

町と連携し、仕事を生み出し未来を創るマインドとスキルを身につけるアントレプレナーシップ教育を展開。1年次は課題発見、2年次は課題解決、3年次は課題発展に取り組む。



私たちが出した答えは「やってみないとわからない、とりあえずやってみよう」。まずはスコピーの菌株を培養する方法をインターネットで調べ、生物室の一角を借りて毎日みんなで菌株のお世話をしました。何日もかけて育てた菌株に膜ができ、それを乾かしてシート状になったとき、ようやく先が見えた気がしたのを覚えています。

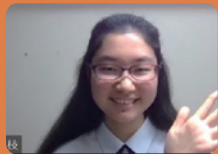
後藤 私たちが着目した「自動販売機」自体は既にあるアイデアなので、考えやすかった面はありますが、だからこそ「どんな自動販売機にするか」がポイントだったと思います。最初、そもそも「地域の賑わいとは何か？」からメンバーと話し合い、住民の皆さんが地域に関心を

もつことが大前提ではないか、当たり前だと思っている地域の価値に気づいてほしい、という思いを強くしていったんです。それが、単に無人で野菜が買えるという企画ではなく、農家の方に作成していただいたミニ料理ブックの設置、地域の保育園の子どもたちの絵で販売機をデザインすることなど、地域の魅力を発信するさまざまな工夫につながりました。

小山 学んできたことを基にすればある程度できると思っていたのですが、始めてみるとかなりの手間と時間がかかりました。実際に街中に出て、機械に点字ブロックや信号機などを覚えさせる必要があります。そしてテストして、うまくいかなかったらプログラムをいじって…ということの繰り返しです。授業の枠だけでは終わらず、放課後や夏休みも使って進めました。

＼ 松本さんの取組 ＼

お弁当カップが
海洋汚染の原因に!?



▶ 食べられるお弁当カップの開発

松本さんら7人チームは、高校生にとって身近な存在であるお弁当用おかずカップが海洋汚染などの環境問題につながっている点に着目。廃棄食材(農産物)由来の乳酸菌などを利用したセルロースゲルにより、食べられるおかずカップを開発した。菌を培養して作ったセルロースのシートを企業の協力を得てカップに成形し、試作品を完成させた。弁当店や飲食店に対する市場調査や収支計画などにも取り組んだ。



左: チームのメンバーと/
右: 試作品使用例

ベースとなった授業

学校設定科目「Creative Solutions」(2学年)

グローバルリーダーの育成を目指して創設された科目。社会課題を解決するビジネスプランを作成する課題研究に取り組み、国内外のコンテストにも挑戦する。

諦めない思いが周囲を動かし
困難をも乗り越える

——どのテーマも、高校生が簡単にできることではなさそうですね。

小山 想定どおりにいかないこともたくさんありました。一番苦労したのは、信号機を検出させることです。最初、信号の人型の色で「進む・止まる」を判断しようと思いました。でも現実には、歩行者用信号には人型の内側が光るものと外側が光るものがあったり、光源によって色が微妙に違ったり、予想以上にたくさんの種類があったんです。そのすべてに対応させるにはどうしたらいいのか、頭を抱えてしまって…。

そんなふうに壁にぶつかったときは、**高校の先生のほか、産学連携制度を利用して企業や大学の方にもヒントをいただきました。**このときも、企業の方のアドバイスを基に別の方法を



試してみるなどして、突破口を開きました。そうして、5分の1スケールの試作品完成までたどりつきました。

泉 私は山登りイベントの企画を考えたとき、コウヤマキ自生林は県の自然環境保全地域に指定されているので勝手に入れないと聞いて、無理かもと諦めかけました。でも、**山の管理者の方に私の考えを伝えたところ、県に掛け合い許可を取ってくださったんです。管理者の方も「地域のコウヤマキを知ってほしい、大切にしてほしい」という気持ちは同じだったから、私の思いが響いたのではないかと思います。**

また、個人プロジェクトだったので、準備から運営まですべて一人でやらなければならず大変でしたが、友達が参加者集めに協力してくれたり、コウヤマキに関わっている地域の方が手伝いを買って出てくださいたりしました。皆さんの協力があったから実施できたイベントで、当日、参加者の皆さんが険しい道に「えらい、えらい(きつい)」と言いながらも楽しんでくれたことが、とても嬉しかったです。

松本 おかずカップの制作工程で最大の難所は、培養してできたシートをきれいに成形するところで、さすがに自分たちの力だけでは難しいと思いました。少しでもヒントが得られたらと60社以上の企業にアンケートを送ってみたところ、**企業の方は質問への回答以外にもいろんなことを教えてくださいました。ここまで協力してくださるのかと、驚いたことが印象に残っています。そうしたやりとりのなかで「実際にやってみましょうか」と申し出てくださる企業があり、きれいにプレスすることができました。**

後藤 私たちにとっては、自分たちのプランを地域の方にプレゼンすることが、最も高い壁でした。

後藤さんの取組

地域の魅力に
気づいてほしい!



▶ 野菜の自動販売機で地域の魅力を発信

高校の最寄り駅周辺の賑わいづくりという授業テーマに対し、後藤さんら4人のチームは、コロナ禍でも3密にならず実施可能な取組として、駅前への野菜自動販売機の設置を提案した。衰退しつつある地域の農業の活性化と、地域の魅力を幅広い世代に発信するのがねらい。SDGsとの関係性やコスト、地域へのインパクトなども踏まえて詳細を練り、授業のゴールとして地域の方に提案内容のプレゼンテーションを行った。



左：地域の方(最前列)を前にプレゼン／右：地域を探索

ベースとなった授業

学校設定科目「起業マネジメント」(2学年)

地域や企業の課題を解決するビジネスプランの作成に取り組む。地域課題を「じぶんごと」として捉え、「みんなごと」として取り組むことで、社会を変化させる力を育むのがねらい。

相手は地域のことを知り尽くした方々ですから、「何考えてんねん」とはねつけられないかとすごく不安だったんです。私は元々あがり症ということもあり、**原稿をしっかりと練るなど、事前準備を徹底して臨みました。本番は緊張で言葉に詰まる場所もあったのですが、アイデアに対して地域の方から「実現可能である」と好評をいただいたときは、驚きと喜びでいっぱいでした。**

高校生にもできることがある
自分を信じて粘り強く取り組む

——取り組んだことは、自分自身にどんな影響がありましたか。

小山 僕はうまくいかないことには早めに見切りをつけるほうでしたが、諦めずに次にどうするかを考えて、粘り強く挑戦し続ける力がついたと思います。

松本 これまで社会課題の解決は国や地方自治体など公共機関の役割だと思っていました。今回の活動を通じて、ビジネスの力を活用する方法もあるのだと気づきました。

泉 私は“地域に頼る力”が身についたと思います。活動前は地域の方が本当に協力してくださるか不安でしたが、自分の思いをしっかり伝えればきちんと応えてくださり、むしろ「そういうふうな若者が動いてくれることが嬉しい」と

歓迎していただけて。これからもどんどん行動していけばいいんだと考えるようになりました。

私のほかにも、吉賀高校にはいろんな地域課題に取り組むチームがあります。内容や方法は何であれ、こうした高校生の活動そのものが吉賀町の名前を広め、結果的に私たちが目指す「地域を元気にする」ことにつながるのかなと思っています。

後藤 地域の方へのプレゼンでは、手応えの一方で、思いを100%伝えることができないもどかしさや悔しさも感じました。もっと語彙力や表現力を磨きたいと強く思い、その後は自分から人前で話す機会を増やすようになりました。また、「起業というのは誰か偉い人がするもので自分には関係ない」と思っていたのですが、志があれば誰でも起業していいんだと、私の選択肢の一つとして考えるようになりました。

以前は消極的なタイプだった私が、ここまで自分を出せるようになったのは、高校の環境が大きいと思います。自分で考えて行動するプログラムがあり、先生方は私たちのやりたいという気持ちを尊重して見守り、困っているときは的確なアドバイスで応援してくださいました。だからこそ、私は内に秘めていた燃えるものを思い切り発揮できたのだと、とても感謝しています。

＼小山さんの取組／

目が不自由だと
こんなに不便とは…



▶ 盲導犬ロボットの開発

網膜剥離を患った経験を基に、ほかの2人と共に「盲導犬ロボット」の開発に取り組んだ。GPSで進行方向を察知し、カメラで点字ブロックや信号を認識する仕組み。利用者がロボットの上部に触ると走行し、音声で情報を伝達して誘導する。アントレプレナーシップ養成を目的として茨城県教育委員会が行う産学官連携事業を利用して、大学や企業の支援を得ながら、5分の1スケールの試作品を完成させた。



左：信号機認識の実験
右：完成イメージ

ベースとなった授業

「課題研究」(3学年)

ロボット工学科の「課題研究」は、社会課題をロボット技術で解決し、利便性や効率性を超えた豊かな社会の実現に貢献することがコンセプト。同じ志をもつ生徒がチームとなって取り組む。

前向きに広がり、
高まる将来の可能性

——ご自身の将来に対するお考えや、現在の目標をお聞かせください。

泉 1年生のときは特にやりたいこともなかったのですが、地域の方と関わるなかで、「地域に貢献できる人になりたい」という思いがどんどん強くなりました。地域の方がぼそっと口にし

た、「私がお空に行って地上を見下ろしたとき、町がなくなっていたらすごく悲しい」という言葉が忘れられません。どうやったら持続可能な町にしていけるのか。大学に進学し、第一次産業と経済をつなげるという角度から考えていく、というのが今の私の目標です。

松本 私には高校に入学したときから、将来は国際的な課題を解決する仕事につきたいという思いがあります。今もその方向性は変わらないのですが、ビジネスでの関わり方もあると知ったことで、将来のフィールドが広がった感じがしています。また、一つのビジネスプランの取組には文化や科学などさまざまな視点、知識が必要なのだと感じたので、大学進学後はまず幅広く教養を身につけたいと思います。

後藤 私は高卒で就職しようと思って商業高校に入りました。でも、高校でさまざまな経験をするうちに、地域への関心を大切にしようとして勉強していきたいと思うようになり、担任の先生の後押しもあって大学進学に方向転換しました。今は大学の地域経営学部で、自ら地域に飛び込んでいながら学んでいます。将来も地域に関わる仕事をしたいと思いますが、自分のなかに起業を含めてたくさん選択肢があって具体的に絞り切れず、今、悩んでいるところです。でもこれは良い悩み。きっとどこにでも進んでいけるという、前向きな気持ちで考えています。

小山 小学生のころ、東日本大震災の原発事故現場で活躍するロボットを見てから、僕の目標はロボット技術者になることです。高校では、知識や技術だけでなく、技術者としての心構えも学びました。そのなかでくつきりしてきたのが、ロボットではなく人が主役になるものを作りたいということ。例えば、盲導犬ロボットよりも、

自動走行する車いすのほうが楽に移動できますが、それでは歩行を諦めることになってしまいます。そうではなく、人の可能性を切り捨てないロボットを作りたいのです。高校時代にできなかった盲導犬ロボットの完成は、ぜひ近い将来に実現させたいと思います。

取組を終えて…

私たちの気づき

自分が“いかに知らないか”を知ることができる



身近な課題に取り組む意義は2つあると思います。1つは、学校外の方と関わるなかで、思いを伝える力がつくこと。もう1つは、自分が「いかに知らないか」に気づくこと。私も、生まれ育った地域のことすらよく知らないと自覚したことが、目標につながる一歩になりました。(泉)

“社会の中にいる自分”を実感できる



おかずカップのメーカーやそれを使う業者の方など、活動したからこそその出会いがたくさんありました。それによって、社会はたくさんの方々によって成り立っていて、自分はその中で生活していることを実感しました。高校時代にこのように視野を広げるのはとても大事だと思います。(松本)

自分の将来の選択肢が広がる



忙しい高校生活のなかで活動するのは大変ですが、自分の将来の選択肢を広げることができると思います。あまり自分に関係ないと思うことも、思い切って飛び込んでみると、意外と自分の考えていたことや学んだことがつながり、多くの気づきがあるものです。(後藤)

回り道しながら一歩ずつ進める意識に



何ごとも挑戦しないと始まらない、ということを学びました。もちろん失敗することもあります。それで終わらず次にどうするかを考える。一本道でゴールにたどり着けなくても、回り道しながら一歩ずつ前に進められればいい。そんな意識が大切かもしれません。(小山)





小さな
気づきが
世界を
変える。



半径5メートルに 「問い」を立てた アントレプレナーたち

自分がつくり出したい未来に向けて、活動する起業家たち。
その背景には、きっかけとなる自身の経験があり、
そこから生まれた問いや気づきが、事業のタネになっています。
今回は、4人のアントレプレナーの起業ストーリーをお届けします。



取材・文／笹原風花
写真／吉永智彦(23、27ページ)、
加藤隆介(25ページ)、
丸山 光(29ページ)



祖母の自宅介護を経験。
打ち手がわからず、つらい日々が続いた。

宇井吉美さん

うい・よしみ ●株式会社aba代表取締役CEO。ケアテック領域の第一人者である富山 健先生の下で学びたいと、千葉工業大学先進工学部未来ロボティクス学科に進学。2011年、在学中に起業。「支える人を支えたい」という思いから「船橋ワーキングマザーの会」の事務局も務める。

株式会社aba

最先端のロボティクス技術で、介護業界の変革に挑むケアテック企業。排泄ケアシステム「Helppad」を開発・販売するほか、集積したデータを基に業務フローの最適化を図るツールなども開発している。



支える人の「わからない」をなくせば、
介護は「したくなるもの」になるのでは？

支

える人を支えたい。この思いが、私を突き動かしてきました。介護に携わる人は、国内に900万人以上。特に排泄ケアの負担は課題になっています。ケアする人の「オムツを開けずに中が見たい」という声に応えて開発したのが、臭いで排泄を

検知し、オムツ交換のタイミングを通知するシステム「Helppad(ヘルプパッド)」です。

技術の力で介護の課題解決を目指す研究を知ったのは、大学のオープンキャンパスでのこと。介護ロボットを見て、これだと思いました。というのも、私は中学生のころに祖母の介護を

経験し、大変さを痛感していました。また、当時はインターネットの黎明期で、デジタルテクノロジーの可能性に魅了されていました。これらを掛け合わせたのが、介護ロボットだったのです。

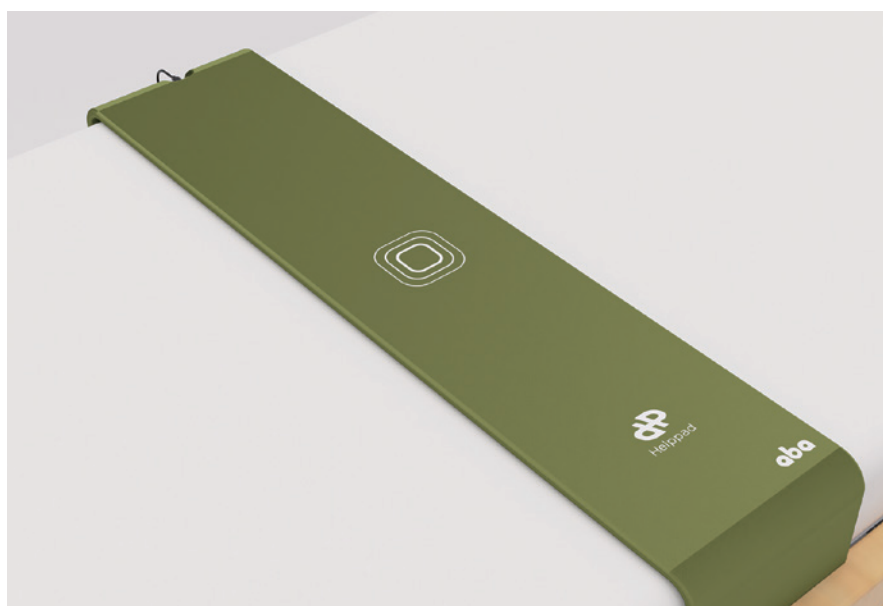
介護施設で排泄介助の壮絶な現場を目の当たりにした経験から、大学では排泄検知センサーの研究・開発に取り組みました。介護現場の方々のためにも製品化を目指していましたが、企業との共同プロジェクトの話が流れてしまっただけで、「自分で会社を作る選択肢もある」と言われたのをきっかけに、初めて起業を意識しました。そして、ビジネスコンテストに応募したり、起業家をはじめさまざまな方に相談したりするなかで、起業を決意しました。

起業して数年間は、介護施設でも働きました。そこで実感したのが、介護の楽しさでした。祖母の介護が伝わらなかったのは、やりたくても打ち手がわからなかったから。ケアラーの「わから

ない」をなくせば介護は「したくなるもの」にできる、それをテクノロジーで実現しようと、思いを新たにしました。

起業から約10年。ようやく商品・サービスとして提供できるようになりました。学生時代の私は、電子回路もプログラミングも苦手。でも、実現したいビジョンや情熱は人一倍ありました。自分一人では実現できないからこそ、それが得意な人たちを巻き込みながらここまでできました。相当熱っぽく語っているようで、取締役の谷本は、「宇井が見ているビジョンが見えた。それが実現した世界を見てみたい」と仲間になってくれました。

ここまで諦めなかったのは、「大したことのない私が失敗したって、大したことはない」と開き直れたから。だからこそ、「じゃあ、やってみるか!」と前向きになれたんだと思います。



2023年秋には、尿・便が識別可能になるなどより進化した「Helppad2」を発売予定。
※仕様および外観（形状や色）は変更する可能性があります。



被災地での活動で、 新たな産業なくして復興はないことを実感

佐々木道彦さん

ささき・みちひこ ●南三陸ワイナリー株式会社代表取締役。大学卒業後、ヤマハ株式会社にて商品開発・新規事業開発に携わる。退職して仙台に移住し、プロダクトの企画・開発に携わるなかワインと出会う。2019年に南三陸町に移住・起業し、翌年、ワイナリーを開業。

南三陸ワイナリー株式会社

「南三陸のみんなとおいしくなりたい」をコンセプトに、南三陸の食材と合うワインを醸造。ブドウ栽培、ワインの海中熟成、収穫祭、ワイン会、生産者との交流イベントなど体験型コンテンツにも力を入れている。



新たな産業でまちを活気づけ、 南三陸の豊かな食文化を伝えるには？

私

は今、宮城県・南三陸町でワインを作っています。南三陸町は、山と海がつながった循環型の土地で、海産物から野菜や米、豚、羊、牛まで、食材の宝庫です。一方、東日本大震災により人口減少が加速し、2045年には現在の約半数になる

とされています。南三陸の豊かな食文化を多くの人に知ってもらいたい。新規事業により街を活気づけたい。そんな思いから、南三陸の食材に合うワインを生産しようと決意し、移住・起業を決めました。

そもそものきっかけは、東日本大震災後に

参加した、東北でのボランティア活動でした。当時は、大手楽器メーカーで商品開発や新規事業開発に取り組んでいましたが、次第にアプリやインターネット配信サービスの開発が中心になり、顧客とのリアルなコミュニケーションがなくなってきたことに違和感を覚えていました。そうしたなか、全国から集まった思いをもった人と一緒に瓦礫の撤去作業などを行っているうちに、人とのつながりを大切にしながら被災地のために何かできないか…と考えるようになったのです。

被災地に身を置いて実感したのが、高齢化や人口減少が止まらないなか既存の産業の復旧には限界があり、新しい産業を生み出さないと人や賑わいは戻ってこない、真の復興にはつながらないということでした。そこで、新規事業開発の経験を活かして被災地で何か新しいことをやろうと考え、2014年に仙台に移住しました。

その後、仕事でワイングラスを手がけたことをきっかけに、誰かと楽しむ、みんなで楽しむ、食と一緒に楽しむというワインの魅力を知り、ワイナリーをやりたいと思うようになりました。宮城県内のワイナリーで手伝いながらワイン作りを

学んでいたところ、南三陸町でワインプロジェクトが立ち上がったことを知り、「これだ!」と思い移住体験ツアーに参加。地元の人と話し、南三陸のことを知るにつれ、ここでワイン作りをしたいという思いが強くなりました。

ここでやると決めてからは、「なぜワインなのか？なぜ南三陸町なのか？」という問いを掘り下げながらコンセプトを練り、まちの人に伝え続けました。また、町のイベントなどに出店してワインを飲んでもらう機会を設け、畑にも通い続けて私たちの思いを理解してもらえるよう努めました。当初あった不安の声も応援へと変わり、多くの人に支えてもらいながら2020年にワイナリーを立ち上げました。

私が大事にしているのが、地域の生産者と一緒になって南三陸ブランドを構築していくこと。「みんなで地域を盛り上げる」という根っこの部分に共感してくれる人の輪がどんどん広がって、ブドウの栽培や収穫を手伝ってくれる人は累計で2千人以上になりました。ワインは、人と人、人と食とをつなぐ食文化のハブです。体験型ツーリズムなど思い描いてきた事業計画を一つひとつ実現し、持続可能な地域社会を構築するのが今の目標です。



地元のリンゴを使ったシードルや、漁師さんの協力の下、海中熟成させたワインもある。

予期しない妊娠を経験。
性についてきちんと知っておきたかった。

染矢明日香さん

そめや・あすか●NPO法人ピルコン理事長。慶應義塾大学卒業後、民間企業でのマーケティング職を経て、2013年にNPO法人ピルコンを設立。生徒、教員、保護者などを対象にした性教育講演のほか、イベントや啓発資材の企画、動画の制作・発信、政策提言などを行う。

NPO法人ピルコン

中高生に向けた性の健康の啓発活動を行う団体。医療従事者などの専門家の協力を得ながら、若者には性について学び、語り合い、相談できる機会を、大人には子どもへの性の伝え方を学ぶ機会を提供している。



性についての正しい知識を届けられたら、
同じ思いをする人を減らせるのでは？

私

は現在、仲間と共に、中高生に正しい性の知識を伝えるための活動をしています。きっかけは、私自身の予期しない妊娠でした。当時は大学3年生で、就職してバリバリ働きたいと思っていた私は、悩んだ末に中絶を選びました。自分を責める気

持ちやつらく苦しい思いは、計り知れないものでした。

翌年、授業のなかで、関心のある社会課題について解決のためのアクションを起こす、という活動に取り組みました。自分や友人の問題意識を共有し、私たちのチームは避妊をテー

マに選びました。当時の中絶件数は、年間約30万件。自分と同じようなつらい経験をしている人がこんなにいるという現状にショックを受けると同時に、性や避妊についての教育をきちんと受けてこなかったのは社会に課題があるのではないかと感じました。私たちの発表を聞いた周りの学生の反応も、「中絶件数ってそんなに多いの!？」という感じで。自分たちももっと知りたい、みんなにももっと知ってほしいという思いから、授業後も学生団体「ピルコン」として活動を継続。今以上に偏見の強かった中絶やピル、避妊などについて勉強し、勉強した内容を学生に向けて発信していきました。

私はもともとボランティアなどに積極的に参加するタイプではなかったのですが、原体験を通して社会課題に気づき、これまでなかった知識を学びながら届けていくピルコンの活動にやりがいや面白さを感じていました。一方、企業で働きたいという思いも強く、卒業後は就職。ピルコンの活動は次第に下火になっていきました。

転機は入社3年目でした。仕事は楽しかったものの、自分が本当に必要だと思えるもの、世の中に広めたいものを発信したいと思うようになって。それってなんだろうと考えたときに、学

生時代にピルコンとして伝えてきたことだと行き着いたんです。自分がしたようなつらい体験をする人を減らしたい。未然に防ぐには、誰にどんな情報を届けたらいいだろう。そう考えていたときに、秋田県の事例を知りました。中高生に性教育を実施したところ、10代の中絶率が大きく下がったというのです。そこで、学校を通して中高生に向けて性教育を届けようと、活動のターゲットを決めました。

自分の可能性を試したい、挑戦したいという思いが強く、法人化しました。右も左もわからない状態でしたが、集まってくれた仲間のなかに、会計に強い人、NPO立ち上げ経験のある人などがいて、力になってくれました。私自身も含めて仲間に共通するのが、チャレンジを楽しめる、ということ。うまくいく保証はないけど、こうしたらできるんじゃないかと前向きに挑戦できる、ワクワクできるんです。なぜなら、誰もが自分らしく生き、性の健康と権利を実現できる社会にしたい、自分と他者の心と体を大切にできる社会にしたいというビジョンを共有しているから。これからも生きるための力を育むためのポジティブな性教育を、若い世代に届けていきたいと思います。



人生のデザインに必要な探究型学習をサポートする教材サイト「ライフデザインオンライン」(<https://lifedesign.pilcon.org/>)も運営。



東京生まれ東京育ちで「田舎」がない。
いつか地方でも暮らしてみたい。

川元一峰さん

かわもと・かずみね ● 東急株式会社 ホスピタリティ事業部 事業戦略グループ 主査。2011年に入社し、経理担当を経てグループ企業へ出向。エリアマーケティングや構造改革に従事する。その後、株式会社東急ホテルズへ。「TsugiTsugi」を立ち上げ、現在はその責任者を務める。

TsugiTsugi

都市型ホテルからリゾートホテル、グランピングまで全国の多様な宿泊施設を定額で利用できるサービス。宿泊日数によりプランを選べ、旅するように暮らしたい、ワーケーションをしたいといった層に支持されている。



働く場所や時間に制約がなくなれば、
旅するように暮らせるのでは？

東

急(株)(以下、東急)には、チャレンジする企業風土を醸成することを目的にした、「社内起業家育成制度」があります。この制度を利用して私が2人の仲間と提案・実装したのが、定額制回遊型住み替えサービス「TsugiTsugi」です。定額

の利用料で、全国180あまりの宿泊施設を自由に利用できます。

私は東京生まれ東京育ちで、帰省する田舎がある友人がうらやましくて。東京以外の場所での暮らしや地縁に憧れがありました。大人になってからも、今の仕事を続けながら地方に移

住できたら面白いなと考えていました。

まだ在宅勤務が一般的ではなかった2016年、経理の仕事をするなかで、会社から個人に支払われる交通費の非課税上限額(月額)が15万円に拡大することを知りました。調べたところ、東急本社のある渋谷からだと限度額内で長野県の上田まで行けて、北陸新幹線は全席にコンセントが付き、トンネルでもWi-Fiが使える仕様になっていて。今後は地方に住んで通勤時間に仕事をする人が増えるんじゃないか、働く場所や時間の制約がなくなるんじゃないかと考えました。そして、自分ならこうしたいという思いから、「旅するような暮らし」をコンセプトにした事業案を社内起業家育成制度に応募したのです。当時は居住地として空き家の活用を考えており、実現性の低さから落選。一方、着眼点や発想は面白いと言われたこともあり、完全に諦めはせずに業務外で検討を続けていました。

グループ会社で組織の構造改革に携わった後、2020年4月に東急ホテルズに出向しました。業界全体がコロナ禍の大打撃を受けるなか、東急ホテルズにも構造改革が求められ、私はその要員でした。あるとき東急ホテルズの社長(当時)から、「コストカットだけでなく、新しい稼ぎ方を考えなさい」とだけ書かれたメールが送られてきました。その瞬間でした、「空き家じゃなくてホテルでやればいいじゃん!」とピースが噛み合ったのです。その足で社長室に行って提案すると、「いいね、すぐやろう」と。翌月には東急の社長の前でプレゼンをして、TsugiTsugiの先行体験を実施することが決定しました。コロナ禍によりリモートワークが浸透したこともあ

り、先行体験では大きな手応えを感じました。その後もプランや提携施設・サービスを拡張し、現在は第3弾を実施中です。

社内起業では、いわゆる起業とは違い、最終判断は会社がします。予算も獲得しなければなりません。だからこそ、OKをもらうためにはどうしたらいいかを戦略的に考えて行動しました。自分の思いはもちろん会社にとってのメリットも訴えなくてはなりませんし、社内に自分の仲間や味方を増やさなければなりません。そう考えると、自分がやりたいことを実現するためにはどうしたらいいかを考え、諦めずに模索するというのは、組織で働く人にこそ大事なマインドなのかもしれませんね。



北海道から沖縄まで全国約180の施設に定額で泊まり放題。同伴者1名も無料。





Reportage

モノをつくる力で、コトを起こす

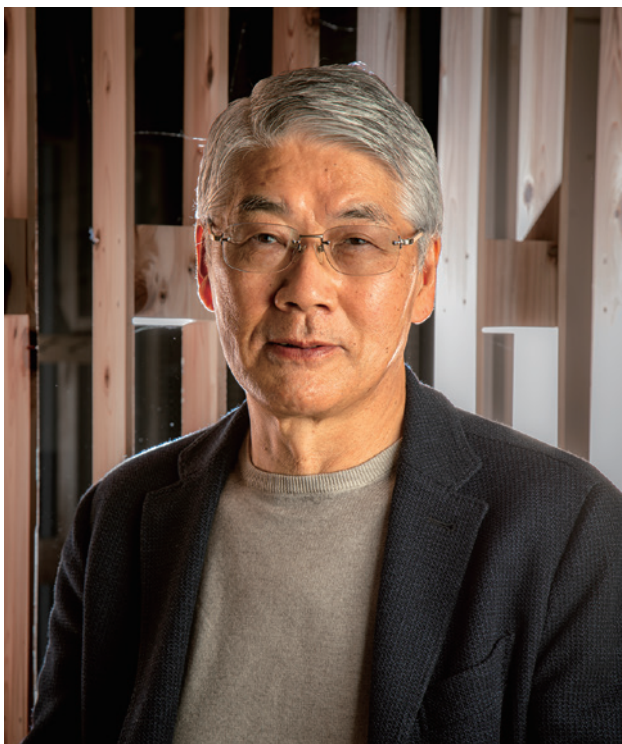
起業家精神を育む 「神山まるごと高専」と、 大きく人が育つ 小さな町の物語

地方創生のロールモデルといわれる徳島県神山町に、今年4月開校する「神山まるごと高等専門学校」が話題です。同校が掲げる起業家精神=アントレプレナーシップとは何か、なぜそれが、小さな山間の町で育まれるのかを取材しました。



2023年4月、「神山まるごと高等専門学校」(以下神山高専)という名の高等教育機関が開校する。19年ぶりとなる新設の高専だ。育てたいのは、「モノをつくる力で、コトを起こす人」。デザインおよびテクノロジーといったモノをつくる力を基盤に、起業家精神を育むという、これまでにない学校であり、卒業後の進路イメージとして、「就職30%、編入30%、起業40%」を掲げている。「美大、工学部、MBAを合わせたような学校」という例えがわかりやすい。一学年の定員は40人で全寮制。一期生の学費の実質無償化が発表され、二期生以降もその実現を目指している。

注目すべきはキャンパスが置かれた場所。徳島県の山間に位置する人口5000人ほどの神山町は、「奇跡の町」「最先端の過疎地」とも呼ばれるなど、地域創生のモデルとして知られる。急速な人口減少が進む一方で、数々のベ



認定特定非営利活動法人グリーンバレー 理事
神山まるごと高専設立準備財団 代表理事

大南信也さん

ンチャー企業がサテライトオフィスを構え、ユニークな移住者が次々とやってくる。「よそ者」と町民が絶妙な距離を保ちつつ融和し、食や林業を中心に循環型経済が構築されつつある。

地域と連携した教育も盛んで、神山高専の誕生もこうした土台があっこそ。そのことを理解するために、また、この町の人々がもつアントレプレナーシップを感じるために、まずは地域創生のキーパーソンである大南信也氏の視点を借り、町の30年を振り返ることから始めたい。

第一章

なぜ小さな田舎町によそ者やITベンチャーが魅かれるのか

始まりは1990年、建設業を営んでいた当時37歳の大南氏が、PTA副会長を務める小学校に保管されていた青い目の人形に出会ったことだ。戦前に友好の証として米国から送られてきた、同人形の里帰りプロジェクトが企画され、30人の訪米団が現地で歓迎された。この成功体験を基に大南氏は、継続的な草の根の国際交流を行う場として神山町国際交流協会を立ち上げる。そして県が構想する国際文化事業に乗る形で、アーティスト・イン・レジデンスという活動を開始した。国内外のアーティストを一定期間招き、住民と交流しながら創作活動に専念してもらおう取組だ。何もないけど緑はあって人もいる。居心地の良さから、そのまま定住する人も現れた。「やったらええんちゃう」が口癖の大南氏。そんな緩さがあり、よそ者に温かい町として知られたことで、また、他に先駆けた光ファイバー網の整備や、県が進める移住支援も追い風に、起業を希望する移住者が増えていった。だが移住にミスマッ



チは付き物。そのため半年間かけて地域づくりを学びながら現地に親しんでもらう「神山塾」という地域人材育成事業も開始した。2010年には、ITベンチャーのSansan(株)が、働き方改革の一環でサテライトオフィスを開設。町内にコワーキングスペースを整備したこともあり、多くの企業が拠点を構えるようになった。ちなみに、Sansan社長の寺田親弘氏はこのころから「上場を果たした後はエネルギーと教育に取り組みたい」と熱心に語っていたことを大南氏は覚えている。

この間、神山町国際交流協会はNPO法人化され、名をグリーンバレーと改めた。大南氏が学生時代に過ごしたシリコンバレーにあやかってのことだ。自由な雰囲気の中なかで何か生まれる町にしたいという願いの通り、次々と新しいコトが生まれていった。

その古参メンバーで、外国人や神山塾生に、住まいを提供するなど支援を続けてきた「神山の母」的存在がいる。栗飯原國子さん(80)だ。最近まで、主婦仲間と開業した梅星茶屋という食堂で、週一回手料理を振る舞っていた。驚くのは、当時67歳だった國子さん自身が神山塾の一期生だったことだ。

「外から来た若い人との会話で、わからない言葉がたくさんあったのが腹立ってね。歳もいってたけど塾長に無理言って参加させてもらったんよ。人生で最高にリッチな半年間やった」

コトを起こすのに年齢は関係ないことを教えてくれる。

住民が危機感を共有し 自分事として未来を切り拓く

栗飯原夫妻や大南氏に代表される住民の



町の中央を流れる鮎喰川沿いに新築された木造平屋建ての校舎(右)。神山産の木材がふんだんに使われている。川を挟んで左奥に見えるのが、神山中学校の旧校舎を改装した学生寮。校舎をオフィス、寮をホームと呼ぶ。

温かさや寛容さ、何より人の縁によって、多くの方が導かれるように町にやってきたが、人口減少は止まらない。消滅可能性が高い自治体の上位にあげられたこともある。

そんなとき転機が訪れた。政府が地方創生を打ち出し、神山町でも総合戦略策定の議論が住民を交えて始まったのだ。その名も「まちを将来世代につなぐプロジェクト」(つなプロ)。「すまいづくり」「食べる」「育つ・学ぶ」などのワーキンググループ単位で意見が交わされた。

このWGにはポイントがあった。議論に先立ち「私がやる、という主体者がいないプランは採択しない」と宣言されたことだ。他人事のような案や理想論は必要ない。この機を逃したら町の復活はない、という危機意識が共有されていた。そのため半年間の議論を経て、2015年暮れにまとめられた戦略はすべて実現を前提としたものだ。当時、町職員だった白桃 薫氏が属した「食べる」グループの提案も然り。このとき町の重鎮が居並ぶ席で白桃氏がした発言が語り草になっている。

「このプロジェクトをぜひやりたい。今の立場のままではできないのであれば、公務員を辞めてでも関わりたい」

実は白桃氏は当初、「また、骨を埋めるつも



りのない移住者やIT企業を優遇する施策が始まるのか」と議論自体を冷ややかな目で見ている。しかし移住者と腹を割って話すうち、町を良くしたいという思いは同じであることがわかり、心境が一変したのだ。

本人は、大袈裟なことを言ったつもりはないというが、発言を受けた側は心を動かされた。大南氏は「町が変わることを確信した瞬間でした」と語る。

後にまとめられた同プロジェクトの資料には、次のように書かれている。

——よく出来た計画書をつくっても実行出来なければ意味がありません。そのようなことにならないように「いまやるべきこと」と、「いまできること」が十分に重なる神山町の創生戦略づくりを心がけました。「できること」の中で最も重要なのは、それをやる意欲と力を持ち合わせている人がいることです

新たな価値を生み社会に変化をもたらすマインドがアントレプレナーシップだとして、それを行う主体は誰か。他の誰かではなく自分だ。白桃氏はフードハブ・プロジェクトという地産地食を進める法人の設立に関わり、数年後、それに専念するため役場を退職。現在は、農場や食堂・パン屋などを運営するほか、神山高専と連携し、寮の給食で提供する食材すべてを地場のもので購入することを目指す新たな挑戦も始めている。このほか、町の林業を活かした住宅づくりなどのプロジェクトもスタート。官と民の間を取りもつ存在として、「神山つなぐ公社」という公的機関も設置された。その仕組みのお陰で、地元の児童・生徒が、地域と共に学ぶ活動も盛んになっていった（城西高校神山校の実践は39、40ページ参照）。

第二章

ゼロからの学校づくり 賛同者はどう増えていったのか

同じころ、サテライトオフィスを構えて以降、町に深くコミットしてきたSansanの寺田社長が夢実現に向けて動き出す。モノづくりの力を武器に社会を変えられる人材を育てたい。そのためには新しい学校が必要であり、神山町ならそれができるはずだと。寺田氏もシリコンバレー駐在経験があり、田舎からクリエイティブが生まれることを肌感覚として知っていた。

慎重論は出つつも、用地の無償貸与ほか、町が全面的に後押ししてくれたのは、「つなプロ」での議論があったからと大南氏は考えて



神山まるごと高専 事務局長、副校長
松坂孝紀さん



いる。危機意識を共有したことと、一人の熱意が「コトを起こす」ことを体感していたからだ。

そして寺田氏をはじめ、クリエイティブディレクターの山川 咲氏、学校長の大蔵峰樹氏、カリキュラム・ディレクターの伊藤直樹氏(後述)を中心に、プロボノ(専門性を活かしたボランティア)を含め、多くの関係者を巻き込みながらビジョンは共有された。

事務局長・副校長の松坂孝紀氏もその一人だ。人材系のコンサルタントをしていたが、元上司の山川氏から学校づくりの手伝いを打診され理念に深く共感した。ただ、経営を任されていた子会社を辞めることに迷いがあった。かといって会社に籍を置きながら手伝うような中途半端はしたくない。

「地方自治体のコンサルティングを手掛けるなか、現地に身を置くことの重要性を痛感していました。やるなら中心となる誰かが移住する必要があるし、それは自分だと思いました」

悩んだ末、会社のメンバー一人ひとりに言葉を尽くしたうえで、その年のうちに家族と共に移住した。

新しい教育に賛同し、全国から教職員や関係者が集まる

公募に応じ教員も続々と神山町にやってき



栗飯原康史・國子さん

た。昨年度まで鳥取県の私立高校に勤務していた大山力也先生もその一人。前任校では、持ち前の外交性を発揮し、地域の起業家を招いて連続講座を企画したり、シリコンバレーと教室をつないだ起業家育成プログラムを行ったり、アントレプレナー部の顧問として絵や音楽の才がある生徒をプロデュースしたりと、学校と社会とをつなげる活動を続けてきた。

「職業観が乏しく、学校内で世界が完結している生徒の目を開かせたかったんです。世の中には多様な働き方があるし、自分で新しい職業をつくったっていいはずですから。私自身が教師として楽しむ姿を見せながら、そうしたことを伝えようとしてきました」

ただ、大山先生が大切にしてきた地域に開かれた活動も、受験を前に遮断されてしまうことに徒労感があった。

「危機感を抱いたのは、地域の人と真剣に向き合うべき活動が、AO・推薦入試のためのツールと化しそうな現実でした。そういう私自身、生徒の動機付けのために『受験でも役立つよ』と言ってしまうこともある気持ち悪さ。そんなとき神山高専のことを知り、5年間かけてトライ&エラーを繰り返すことで生まれる学生の成長を見てみたいと感じたんです」

もう一人、春田麻里先生は、徳島県の高



㈱フードハブ・プロジェクト 共同代表取締役、農業長 白桃 薫さん



校教員の職を辞してやってきた。

「進路指導中心にやってきたこともあって、親しい同僚からは『これまでの経験が活かせる場なの？ 公務員を辞めて大丈夫？ 東京の人に騙されてない？』と心配されました」

それでも、新しい世界に飛び込んだのは公立高校でやれることに限界を感じていたからだという。

「前任校では社会的起業に関心をもつ生徒が多く、活動の後押しをしていました。管理職に掛け合ってクラウドファンディングに成功した生徒もいました。そうした活動や探究的な学びをしたいのに、結局は受験ありきの教科指導に重きが置かれてしまう。こういう教育は簡単には変わらんやろな。あかん、このままでは寿命が尽きてしまう、という焦りがあったんです」

こうして意欲に燃えるメンバーが集まるが、前例のない学校づくり。1000ページに及ぶ認可申請書類の作成をはじめ、やることは山ほどある。当局からは、サステナブルであることが厳しく問われ、「100年、200年続く学校をつくる覚悟はあるのか」と自問する日々が続いた。今あるルールの上で新しいものをつくることの難しさも痛感した。だから2022年8月、文部科学省から設置認可が下りたときの喜びと安堵感は想像に難くない。学校づくりは起業体験そのものと関係者は口を揃える。ただ、

大人が主人公となる物語はここまで。これからはもちろん学生が主役だと松坂氏は強調する。

第三章

起業家精神とは何か それを、どう育むのか

ここまで起業家精神をキーワードに、神山高専誕生に至るプロセスを駆け足でたどってきたが、では改めて神山高専が考える起業家精神とは何だろう。学校案内には、「まだない価値を生み出す」「世の中に変化をもたらす」といった文言が並ぶが、関係者の口からも同様の言葉が出てきた。

「与えられた条件やその組み合わせで、新しいものを生み出すこと」(大南氏)

「未知の世界に飛び込む力。まだ見ぬものに向き合う力」(松坂氏)

「したいと思ったことを実現できる、そのためのスキル」(大山先生)

では、そうしたものをどのように育てようとしているのか。カリキュラム・ディレクターの伊藤直樹氏(クリエイティブ集団PARTY代表、京都芸術大学教授)は次のように説明する。

「失敗学やポジティブ心理学、リーダーシップほか、欧米の起業家が学ぶような経営学の講義や、大志を抱きやすい哲学的な授業も用意しますが、あくまで“精神”ですから、教科



カリキュラム・ディレクター 伊藤直樹さん



社会科担当教員 大山カ也先生



国語科担当教員 春田麻里先生



書で身につくものではありません。大切なのは『失敗してもいい。まずはやってみよう』といった気持ちになることです。近道は、実際の起業家と直に触れることなので、その機会は数多く用意しています。起業家講師には、やりがいでだけでなく、資金調達の難しさや、仲違いでチームが分裂した苦悩など、生々しい話も伝えてほしい。15歳を大人として接してほしいのです」

38ページ上の図は伊藤氏が作成したカリキュラムの概念図だが、起業家精神についてこう補足する。

「コトを起こすだけなら一人でもできます。でも今の時代で大切なのは、人とのコラボレーションであり、共に生きる力。それらを含めて起業家精神と捉えています。いずれにしろ、この図はあくまで理想像。ビジョンだけ掲げても学校はできませんから、それを具体化するために先生たちと対話を重ねています。中3生等対象のサマースクールでは、架空のスタートアップのミッションやビジョンを英語でプレゼンする模擬授業を設計し、手応えを得ました」

神山の地域性を活かしたフィールドワークや

PBL型の授業も数多く計画されている。「循環型プロダクト演習」は、ゴミ問題を題材に持続可能な社会に貢献するプロダクトを企業担当者とデザインし、プログラミングから実装まで一年かけて行う予定だ。

課外活動や学生生活においても、起業家精神の涵養が意識されている。

「例えば寮では洗濯機の数に限られているため、揉めることが目に見えています。けれど先回りしてルールをつくることはしません。問題が生じたときに自分たちで話し合い、改善していける余白を意図的に設けます。寮生活も改善できずに世の中にイノベーションを起こせるわけがありません。まずは、身近なところから。学校の中には、『こうしたらもっといいよね』と思える機会がたくさんあるはずですよ」

まさに、半径5メートルから始まるアントレプレナーシップの育成だ。そして、こう付け加える。

「社会の側から見て我々が『こんな学校があったらいいのに』と思うように、高校の先生方も『こういう社会だったらいいのに』と思うことがあるでしょう。そうした思いを共有し社会をより良くしていきたい。神山高専の卒業生がそうした役割を率先して果たし、それに影響された人たちが各地でコトを起こす。そんな世界を期待します」



一連の取材で気づいたことがある。「どのような未来を築きたいか」という質問に対し、それぞれ理想は語るものの、同時に、現時点での目標に縛られず、過程で起こる変化を楽しみたいといった意味のことを答えるのだ。例えば、

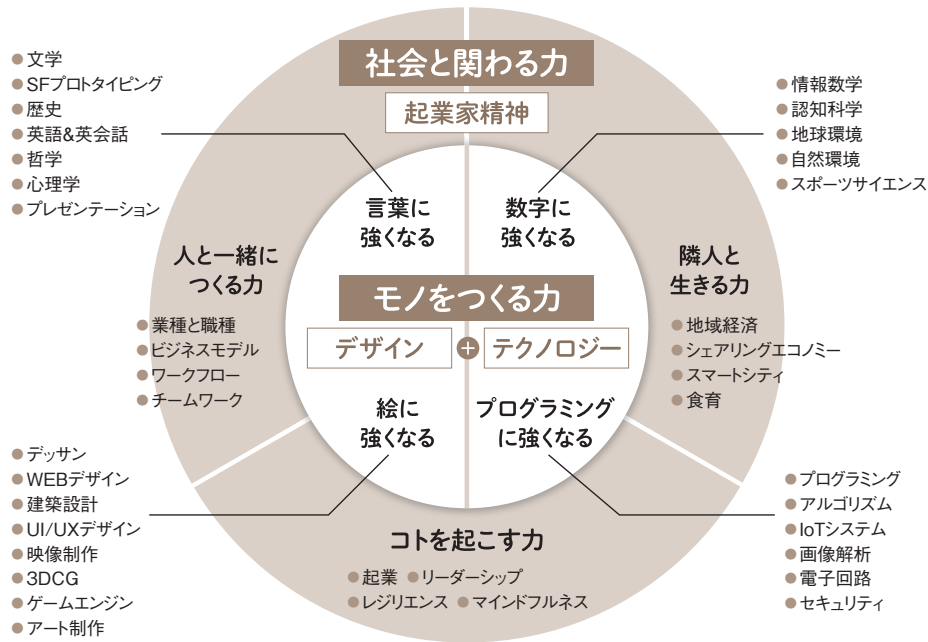
「何も時代を先取りしようと、スローガンを掲げ、ストーリーに沿って今に行きついたのではありません。現条件下の最適化を行うなか、その時々



神山町内のコワーキングスペースに設置された「神山まるごと高専設立準備室」にて。現時点で、現職の高校教員をはじめとする21人の教員が集まった。このほか、一線で活躍する起業家約50人が特別講義を担当する。



図 神山サークル



※資料を基に編集部で作成

に現れる別の条件も飲み込み、形を変えながら、違う次元に到達した感じです。『変化の、その先にあるものを見てみたい』というのが私の変わらぬモチベーションです」(大南氏)

「経験上、絶対これをやり遂げる、みたいに肩肘を張ると、いいことになりません。もっとリラックスして目の前にいる人と向き合い、語り合うことで物事は立ち上がってくるし、やる気も高まってきます」(大山先生)

「最初に着地点を決めきらんことが大事なかな、と思っています。高校現場では、そっちに行っても道はないよ、という教師の心配をよそに勝手に向かっていく生徒もいますが、案外、新しい道を拓き、『ほら、道はあったでしょ』と教えてくれるので」(春田先生)

コンサルタント出身の松坂氏が移住を決断したきっかけも、まさにこれだ。

「コンサルタントが町づくりに関わるときって、最初にシナリオをつくり、それに沿って進めることが普通なんです。そこでは偶発性や変動

性はリスクとしてカウントされ、排除すべきものとして捉えます。ただ、そのやり方で百点の仕事はできても、想像を超えてくるエクセレントなものってできないんですよね。そこに限界を感じていました。そんなとき神山町を初訪問し、ある移住者の方から『町って、つくられたいと思ってないんですよね』と言われ、ハッとしました。そうか、だからこの町はどこか違うんだと。偶発性や変動性を含む、多様な人との関わり合いのなかで物事は予期せぬ方向に進化を遂げていく。自分がしてきたことを根本から問い直し挑戦するチャンスだと思い、移住を決めたんです」

このように考えると、理想と現状の差を課題として捉え、それをいかに埋めるかという実行力や意志の力だけではなく、結果に拘泥せず、プロセス自体を楽しむ柔軟性や好奇心もまた、アントレプレナーシップを構成する要素であり、学校現場でも大切にされるべき視点なのかもしれない。

地域との協働を通して表れた アントレプレナーシップの兆し

城

西高校神山校は、神山町にある唯一の高校だ。伝統的に造園教育に力を入れてきた農業系の高校で、町の人は親しみを込めて、以前の校名である「神山分校」と呼ぶ。ただし、生徒の大半は、徳島市内からバスで1時間以上かけて登校してくる。逆に、神山町の中学生の多くは、普通科を志向し徳島市内などに出ていってしまう。

こうした状況を打開しようと同校では、神山つなぐ公社の力を借りながら地域を学びの場とした教育を実践してきた。例えば、耕作放棄地の棚田を再生し、小麦・そばの栽培・加工・商品開発などを行う「まめのくぼプロジェクト」。山で集めた種や実を苗木に育て、公共施設の植栽などに活用する「どんぐりプロジェクト」。高齢者の自宅を訪ね、庭木の手入れなどの手伝いをする「孫の手プロジェクト」。ほかにもフードハブ・プロジェクトと協働したメニュー開発や、木工製品の製作・間伐体験を行う森林女子部の活動など、学校設定科目「神山創造学」を中心に、課題研究や専門科目の授業、課外活動などさまざまな場面で取り組んでいる。かつて同校の勤務経験があり、2022年度に教頭として赴任した仲野 節先生は話す。

「10年ぶりに戻ってきて、生徒の変化に驚きました。学校運営協議会など大勢の大人を前にした発表で物怖じしないのもすごいし、教室内



教頭・仲野 節先生(左)、教務主任・阿部三代先生(右)



でのちょっとした発表では、発表したクラスメイトに必ず拍手をするなど互いを尊重する様子が伺えます。学校の自慢です」

人数はわずかだが県外募集枠を設け、町営寮「あゆハウス」も完成したことで、各地から生徒が集まるようになった。大阪出身の砂川康介さん(3年)は、神山町に来た理由を次のように話す。「地元の大阪では中学校の先生や、駅ですれ



環境デザインコース3年で行われた庭園施工実習のひとつ。地元の造園業者の協力の下、クレーンを使って巨大な庭石を正門前の庭に配置している。生徒の希望で実施された授業で、設計も生徒たちが行う。安全面に配慮するほか教員は口を挟まない。



「神山町で育ち、中学まで周りは顔馴染みばかりでしたから、高校で多くの人に会い、いろいろな考え方があることに気づきました。私は大学進学のため県外に出ますが、高専ができることで若い人がたくさん来ると思うので、その人たちを通じて神山の名が広まれば嬉しいです」(影 紗那さん)「若い人だけでなく、さまざまな大人も増え、ますます町が面白くなっていくと思います。けれど、神山町に元々ある良さは、失わずに残してほしいです」(砂川廉介さん)。

違う大人がすごく疲れて見えなです。なので高校は地方に行きたいと思いました。地域留学が盛んな島根県も見学し、印象は良かったのですが、神山町は、会う大人全員目がキラキラしていて、そこに魅かれました」

あゆハウスは、食事づくりを含め生徒が暮らしに深く関わるユニークな寮だ。親元を離れ、意志をもって未知の世界に飛び込む姿勢はアントレプレナーシップそのもの。仲野教頭は言う。「起業家という遠い存在に聞こえますが、例えば栽培した小麦やそばを製粉するだけで終わらせず、付加価値をつけて新しい商品を生み出すなど、現状に満足せずワンランク上のモノに

しようとする意欲だって起業家精神の表れだと思います。チームプロジェクトを通じて、そうした気持ちが芽生えているのを感じます」

教務主任で、赴任7年目の阿部先生も言う。「県外から来た積極的な生徒に刺激を受け、町内に住む生徒も負けじと動いてますし、町外から通う生徒も、何かしようという気持ちになっています。町のあるイベントにクラス全員を連れていったところ、普段意欲的に動かないような生徒が、農場で収穫したサツマイモを楽しそうに販売したり、お年寄りの買い物を手伝ったりしていて、こういう一面もあったんだ、と嬉しくなりました」

2019年度に学科再編により、造園土木科・生活科に代え、地域創生類(環境デザインコース、食農プロデュースコース)を設置。同年度から3年間の文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」の研究指定校に。2022年度にはコミュニティスクールになるなど改革は加速している。

近くに神山高専が開校することで、地域からの注目や教育資源が移ってしまうのでは、と心配する声もある一方、農業分野での協働や学校行事・課外活動での連携、教員間の交流ほか、今までとは違うタイプの若者が町に来ること生じる相乗効果に期待もする。

■ 神山校、神山町をより知るための一冊



『まちな風景をつくる学校』
森山円香著(晶文社)



『神山進化論』
神田誠司著(学芸出版社)



編集後記

アントレプレナーシップとは何か？ 育むとはどういうあり方か。編集部でも明確な解をもつことができないまま、それでも何かありそうだという予感から動き出した本特集。取材を進めるなかでまず初めに驚いたことは、どんなにすごいと言われている発見や事業でも、身近な気づきを起点としているものが圧倒的に多いということだ。人知れず問いと失敗を繰り返しながら、人々が求める今の形がある。そしてこの過程は、「探究学習」において日常生活や社会に目を向け、自己のあり方・生き方と一体的で不可分な課題に向き合い続けていく姿勢とも、大いに重なり合うのではないだろうか。深くその世界を知れば知るほど、「既に各学校で取り組まれているもの」のなか、もしくはそれらに少しエッセンスを追加するだけで、アントレプレナーシップ“教育”をも、兼ねることができるよう感じた。

また、取材をしたアントレプレナーたちが、子どものようにキラキラした瞳で自分の話をされることがとても印象に残った。誰もが幼いころからもっていた、「あれ、なんだろう？」と頻繁に道で立ち止まってしまふほど強い、身の回りへの興味・関心。それこそが「身近な気づき」へと繋がっていくのだとしたら、私たちは誰しもう、その発見の機会をもち得ているような期待を感じた。

自分だけの密かでドキドキする小さな気づきが、行動に移して目することで、目の前の景色を変え、町を変え、社会を変え。そして、まだ見ぬ自分へと出会わせてくれるきっかけになるのかもしれない。

赤土豪一(本誌 編集長)

